

博士論文（要約）

論文題目 日本語の評価副詞に関する史的研究

氏 名 林 禎映

目次

凡例.....	5
序章.....	6
1. 本論文の目的.....	6
2. 先行研究の概観.....	9
2. 1 現代語の副詞研究—評価副詞の扱いに注目して—.....	9
2. 2 副詞の通時的研究.....	16
3. 本論文の問題意識・主張と研究方法.....	19
3. 1 先行研究の問題点.....	19
3. 2 本論文の主張.....	20
3. 3 研究方法—時代区分と資料—.....	21
4. 本論文の構成.....	24
第1章 いっそ.....	25
1. 先行研究と問題の所在.....	25
2. 「いっそ」の出自.....	27
3. 時代別の使用実態.....	29
3. 1 中世以前.....	29
3. 2 近世前期.....	31
3. 3 近世後期.....	35
3. 4 近代以降.....	39
4. 史的変遷のまとめ.....	41
第2章 さすが（に）.....	43
1. 先行研究と問題の所在.....	43
2. 「さすが（に）」の出自.....	46
3. 時代別の使用実態.....	47
3. 1 中古.....	48

3. 2 中世前期	50
3. 3 中世後期以降	53
4. 史的変遷のまとめ	54
第3章 しよせん	56
1. 先行研究と問題の所在	56
2. 「しよせん」の出自	60
3. 時代別の使用実態	62
3. 1 中古以前	62
3. 2 中世	63
3. 3 近世以降	74
4. 史的変遷のまとめ	78
第4章 せいぜい	84
1. 先行研究と問題の所在	84
2. 「せいぜい」の出自	87
3. 時代別の使用実態	87
3. 1 近世以前	87
3. 2 近代以降	90
4. 史的変遷のまとめ	98
第5章 せっかく	100
1. 先行研究と問題の所在	100
2. 「せっかく」の出自	103
3. 時代別の使用実態	104
3. 1 中世前期	104
3. 2 中世後期	105
3. 3 近世前期	106
3. 4 近世後期	109
4. 史的変遷のまとめ	112

第6章　せめて	115
1. 先行研究と問題の所在	115
2. 「せめて」の出自	117
3. 時代別の使用実態	118
3. 1　中古	119
3. 2　中世	122
3. 3　近世以降	128
4. 史的変遷のまとめ	133
第7章　どうせ	135
1. 先行研究と問題の所在	135
2. 「どうせ」の出自	138
3. 時代別の使用実態	142
3. 1　近世	142
3. 2　近代以降	149
4. 史的変遷のまとめ	161
第8章　なまじ（っか）	163
1. 先行研究と問題の所在	163
2. 「なまじ（っか）」の出自	165
3. 時代別の使用実態	166
3. 1　上代・中古	166
3. 2　中世	168
3. 3　近世以降	173
4. 史的変遷のまとめ	177
終章	179
1. 結論—評価副詞の形成に見られる変化の特徴と傾向—	179
1. 1　意味的側面から見た評価副詞の形成—様態的意味から価値判断的意味へ—	179

1. 2 構文的側面から見た評価副詞の形成—単文構造から複文構造へ、文中から文頭へ—	187
1. 3 意味的側面と構文的側面の交渉	194
2. 課題と展望	196
参考文献	199
本論文と既発表論文との関係	212
【付録 i】現代語の主な副詞研究における陳述副詞の下位分類	
【付録 ii】調査資料一覧表	

本博士論文は、出版契約がなされ、やむを得ず全文公表できない。著作の書誌事項は以下の通りである。

著者名： 林褪映

題名： 日本語副詞の史的研究―評価を表す叙法副詞を中心に―

出版社：J&C 出版社

出版年：2021 年

ISBN：979-11-5917-185-7

参考文献

- 青木博史（2007）『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
- 青木博史（2010）「第3章「～サニ」構文の史的展開」『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
- 青木博史（2011）『日本語文法の歴史と文化』くろしお出版
- 浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう
- 浅田秀子（2000）「修飾語の意味に伴う評価性—現代「副詞」987語のイメージを中心に—」
山田進・菊地康人・靱山洋介編『日本語意味と文法の風景（国広哲弥教授古希記念論文集）』ひつじ書房
- 浅見徹（1970）「雪は降りつつしかすがに」『岐阜大学国語国文学』6
- 安部朋世（2005）「セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析」『千葉大学教育学部研究紀要』53
- 安部朋世（2006）「副詞セイゼイの意味・用法と「とりたて」の在り方」矢澤真人・橋本修編『現代日本語文法—現象と理論のインタラクション—』ひつじ書房
- 安部朋世（2011）「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエツテの分析」『千葉大学教育学部研究紀要』59
- 安部朋世（2012）「副詞セイゼイと類似表現の考察」『千葉大学教育学部研究紀要』60
- 有田節子（2005）「「どうせ」「いっそ」の分布と既定性」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』13
- 有田節子（2006）「「どうせ」の意味と既定性」上田功・野田尚史編『言外と言内の交流
分野 小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林
- 有田節子（2007）『日本語の条件文と時制節性』大学書林
- 池上秋彦（1996）『国語史から見た近代語』東苑社
- 石神照雄（1982）「様相副詞「セツカク」と構文構造」『信州大学教養部紀要人文科学』16
- 井島正博（1996a）「期待の表現機構」『成蹊国文』29
- 井島正博（1996b）「期待表現の体系」『成蹊大学文学部紀要』31
- 井島正博（2010）「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』6
- 井島正博（2012）「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』8

- 石田正博（2002）「家持二季歌の手法 —「しかすがに」と逆接の助詞「を」をめぐる—」
『国文学（関西大学）』83・84
- 出雲朝子（1973）「玉塵抄の副詞（1）」『青山学院女子短期大学紀要』27
- 板坂元（1970a）「「なまじ」（日本語の生態3）」『国文学解釈と鑑賞』35-7
- 板坂元（1970b）「「いっそ」「どうせ」（日本語の生態4）」『国文学解釈と鑑賞』35-8
- 板坂元（1970c）「「せめて」（日本語の生態5）」『国文学解釈と鑑賞』35-11
- 板坂元（1971a）「「やはり」「さすが」（日本語の生態7）」『国文学解釈と鑑賞』36-1
- 板坂元（1971b）『日本人の論理構造』講談社
- 市川孝（1965）「接続詞的用法をもつ副詞」『国文（お茶の水女子大学）』24
- 市村太郎（2009）「近世後期における副詞「まことに」の意味・用法」『早稲田日本語研究』18
- 市村太郎（2011）「副詞「だいぶ」について—近世語を中心に—」『早稲田日本語研究』20
- 市村太郎（2012）「副詞「たいそう」の変遷—近代語を中心に—」『国文学研究』167
- 市村太郎（2014a）「副詞「ほんに」をめぐる—「ほん」とその周辺—」『日本語の研究』10-2
- 市村太郎（2014b）「近世口語資料のコーパス化—狂言・洒落本のコーパス化の過程と課題—」『日本語学（臨時増刊号・特集「日本語史研究と歴史コーパス」）』33-14
- 市村太郎（2015）「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』11-2
- 井手至（1960）「副詞ツヒニの変遷と展開—古代におけるツヒニ・ツヒニハ—」『人文研究（大阪市立大学）』11-7
- 井手至（1991）「「せめて」について」濱田敦・井手至・塚原鉄雄編『国語副詞の史的研究』新典社（2003年増補版による）
- 井上博嗣（1977）「古代語「さすがに」の意味について—その云々逆接的意味なる—」
『国語国文』46-5
- 井上博嗣（1999）「中古に於ける指示副詞「さ」の程度副詞・陳述副詞化について（2）—源氏物語以前の物語作品を資料として—」『女子大國文（京都女子大学）』125
- 井上博嗣（2008）「現代語の副詞「かならず」「きっと」の意味用法について—夏目漱石・志賀直哉・川端康成の作品を資料として—」『人間文化研究（京都学園大学）』21
- 今西利之（2002）「副詞「どうせ」についての覚え書き」『熊本大学留学生センター紀要』6

- 林禊映 (2011) 「「なまじ (っか)」の意味・構文の史的変遷」『日本語学論集』7
- 林禊映 (2012) 「副詞「せめて」の意味変化」『日本語学論集』8
- 林禊映 (2013) 「副詞「せいぜい」の意味変化—近代語を中心に—」9
- 林禊映 (2014) 「近現代語における副詞「どうせ」の意味用法」『日本語学論集』10
- 林禊映 (2015a) 「副詞「いっそ」の史的変遷」『近代語研究』18
- 林禊映 (2015b) 「近世語における副詞「どうせ」「どうで」の意味用法」『日本語学論集』11
- 林禊映 (2016a) 「副詞「せっかく」の史的変遷」『国語と国文学』93-8
- 林禊映 (2016b) 「副詞「どうせ」「どうで」の否定的評価の形成—類似表現を例にして—」
『近代語研究』19
- 海治美香 (1996) 「「しかたがない」の意味—多義語の意味構造—」『日本語研究 (東京都立大学)』16
- 大石亨 (1984) 「御伽草子の漢語についての一考察」『語文 (大阪大学)』44
- 大槻美智子 (1991) 「「しひて」」濱田敦・井手至・塚原鉄雄編『国語副詞の史的研究』
新典社 (2003年増補版による)
- 岡崎友子 (1999) 「指示副詞の歴史的考察—「カク」を中心に—」『明治時代の上方語に
おけるテンス・アスペクト形式—落語資料を中心として—』文部省科学研究費研究成果
報告書
- 岡崎友子 (2002) 「指示副詞の歴史的変化について—サ系列・ソ系を中心に—」『国語学』
53-3
- 岡崎友子 (2010) 「第3章 語彙から見た指示副詞の歴史的変化について」『日本語指示詞
の歴史的考察』ひつじ書房
- 岡部嘉幸 (2004) 「近世江戸語におけるラシイについて」『近代語研究』12
- 荻野千砂子 (2003) 「不定詞「ドウ」の発達」『語文研究』96
- 呉珠熙 (2000) 「「さすが」に関する一考察—「前提」との関わりを中心に—」『筑波応
用言語学研究』7
- 呉珠熙 (2008) 「「いっそ」の統語的・意味的特徴」『日本語学研究』22 (韓国日本語学会)
- 呉朱熙 (2010) 「「どうせ」の共起関係と文類型について—韓国語の副詞「Eochap, Iwang
(i-myeon)」との対照を兼ねて—」『九州国際大学教養研究』17-1・2
- 呉珠熙 (2011) 「「せっかく」の持つ前提と共起制限の関わりについて—韓国語の副詞「m
ocheoreom, ilkkeott」との対照を兼ねて—」『九州国際大学教養研究』18-2

- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書店
- 小野寺典子（2014）「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」金水敏・高田博之・椎名美智編『歴史語用論の世界一文法化・待遇表現・発話行為一』ひつじ書房
- 影山太郎（2009）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- 加藤薫（1999）「「やはり」論の問題点—その対立する論点の整理と展望—」森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』明治書院
- 加藤克美（1991）「談話における評価副詞について」『関西外国語大学研究論集』54
- 金沢裕之・矢島正浩（2011）『近世語研究のパースペクティブ—言語変化をどう捉えるか—』笠間書院
- 金田弘（1980）「漢籍国字解とその言語—江戸崎門学派の講義筆記を中心に—」『国語学』123
- 川瀬一馬（1972）『江戸時代仮名絵入文学書概論—「江戸文学総瞰」解説並に収録書目—』大東急記念文庫
- 川瀬卓（2006）「象徴詞の「と」脱落についての通時的考察」『語文研究（九州大学）』100・101
- 川瀬卓（2011）「叙法副詞「なにも」の成立」『日本語の研究』7-2
- 川瀬卓（2013）「副詞の歴史的研究における課題と可能性」『弘前大学国語国文学』34
- 川瀬卓（2014）「近世における副詞「どうも」の展開」青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』ひつじ書房
- 川瀬卓（2015）「副詞「どうぞ」の史的変遷—副詞からみた配慮表現の歴史、行為指示表現の歴史—」『日本語の研究』11-2
- 川端善明（1958）「接続と修飾「連用」についての序説」『国語国文』27-5
- 川端善明（1983）「副詞の条件—叙法の副詞組織から—」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 川端元子（1999）「広義程度副詞の程度修飾機能—「本当に」「実に」を例に—」『日本語教育』101
- 菊地康人（2005）「どうせ」の用法の分析」石塚晴通教授退職記念会編『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院
- 北崎勇帆（2014）「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の通時的研究」『日本語学会2014年度秋季大会予稿集』
- 衣畑智秀（2001）「いわゆる「逆接」を表すノニについて—語用論的意味の語彙化—」『待

兼山論叢文学編』35

金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店

金水敏（2004）「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹
編『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版

金水敏・高田博行・椎名美智（2014）『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為—』ひつじ書房

工藤浩（1977）「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会編『国語学と国語史』明治書院

工藤浩（1978）「「注釈」の副詞をめぐって」国語学会昭和53年度春季大会口頭発表（<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kudohiro/tyuusyaku.html>）

工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所
研究報告集3』秀英出版

工藤浩（1989）「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院

工藤浩（1996）「「どうしても」考」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』ひつじ書房

工藤浩（1997）「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法—体系と方法—』ひつじ書房

工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法3 モ
ダリティ』岩波書店

工藤浩（2005）「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-8

小池康（2008）「近現代における「推定」のモダリティ副詞の変遷—ドウモとドウヤラを
中心に—」『日本語と日本文学（筑波大学）』46

小林賢次（2000）『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』勉誠出版

小林芳規（1959）「「花を見るの記」の言い方の成立追考」『文学論藻（東洋大学）』14

小林好日（1941）「副詞「いっそ」の語彙学的研究」『国語と国文学』18-12

小松寿雄（1985）『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版

小柳智一（2009）「同語反復仮定の表現と従属句化」『福岡教育大学国語科研究論集』50

小柳智一（2013）「文法的意味の源泉と変化」『日本語学（特集「これからの古典語文法
研究」）』32-12

小柳智一（2014）「中央語における動詞活用の歴史」『全国方言文法辞典資料集（2）活用
体系』方言文法研究会

- 小柳智一（2015）「文法化の方向」『KLS（関西言語学会）』35
- 小矢野哲夫（1982）「副詞の意味記述について—方法と実際—」『日本語・日本文化（大阪外国語大学）』11
- 小矢野哲夫（1983）「副詞の呼応—誘導副詞と誘導形の一例—」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 小矢野哲夫（1996）「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件—「幸い」と「せっかく」を例にして—」『日本語・日本文化研究（大阪外国語大学）』6
- 小矢野哲夫（1997a）「副詞「せっかく」の用法」『日本語・日本文化研究（大阪外国語大学）』7
- 小矢野哲夫（1997b）「うらめ条件-接続のモダリティ副詞—「たとえ」の使用条件—」川端善明・仁田義雄編『日本語文法—体系と方法—』ひつじ書房
- 小矢野哲夫（2000）「評価的な意味—副詞「どうせ」を例にして—」山田進・菊地康人・榎山洋介編『日本語意味と文法の風景（国広哲弥教授古希記念論文集）』ひつじ書房
- 近藤泰弘・月本雅幸・杉浦克己（2005）『新訂 日本語の歴史』放送大学教育振興会
- 坂梨隆三（1987）『江戸時代の国語 上方語』東京堂出版
- 坂梨隆三（2004）『近世の語彙表記』武蔵野書院
- 坂梨隆三（2006）『近世語法研究』武蔵野書院
- 佐治圭三（1997）「「—のだ」の中心的性質」『京都外国語大学研究論叢』42
- 佐藤喜代治（1971）『国語語彙の歴史的研究』明治書院
- 佐藤喜代治（1982）『講座日本語の語彙5 近世の語彙』明治書院
- 佐藤茂（1959）「「なまじひ」考」『国語国文学（福井大学国語学会）』9
- 佐藤亨（1999）『国語語彙の史的研究』おうふう
- 佐藤宣男（1983）「とかく（兎角・左右）」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 11 語誌Ⅲ』明治書院
- 佐藤宣男（1983）「なかなか(中々)」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 11 語誌Ⅲ』明治書院
- 佐藤順彦（2009）「前期上方語のノデアロウ・モノデアロウ・デアロウ」『日本語文法』9-1
- 佐藤順彦（2011）「後期上方語におけるノデアロウの発達」『日本語文法』11-1
- 佐野由紀子（1998）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195
- 佐野由紀子（1999）「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究

(大阪大学)』6

佐野由紀子 (2008) 「「程度差」「量差」の位置づけ—程度副詞の体系についての一考察—」『高知大国文』39

柴崎礼士郎 (2015a) 「文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性について—「事実」と「問題」を中心に—」国立国語研究所国際シンポジウム「文法化—日本語研究と類型論的研究—」ポスター発表 (http://pj.ninjal.ac.jp/grammaticalization/8_Shibasaki.pdf)

柴崎礼士郎 (2015b) 「「...事実也。」から「。事実...」へ—談話機能の発達に伴う統語位置の変化—」『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所

柴崎礼士郎 (2015c) 「文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性について—「事実」と「問題」を中心に—」『文法化—日本語研究と類型論的研究—』国立国語研究所国際シンポジウム (2015年7月3日-5日)

島田勇雄 (1959) 「近世後期の上方語」『国語と国文学』36-10

杉村泰 (2002) 「否定副詞ケッシテとカナラズシモの意味分析—全部否定と部分否定の間—」『言語文化論集 (名古屋大学)』23-2

杉村泰 (2004) 「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」『言語文化論集 (名古屋大学)』25-2

杉村泰 (2009) 『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房

杉本和之 (2000) 「副詞「どうせ」の意味と機能」『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部 人文・社会科学』33-1

杉本つとむ (1960) 『近代日本語の成立』桜楓社

杉本つとむ (1967) 『近代日本語の新研究—その構造と形成—』桜楓社

杉本つとむ (2001) 「近世語研究にのぞむ—古代日本語研究の新時代—」『国文学解釈と鑑賞 (特集「21世紀の日本語研究」)』66-1

鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房

鈴木丹士郎 (1985) 『論集日本語研究14 近世語』有精堂出版

鈴木丹士郎 (2003) 『近代文語の研究』東京堂出版

関口智恵子 (2004) 「漢語副詞「いちだん(一段)」の史的変遷」『和漢語文研究』2

武内道子 (2005) 「関連性への意味論的制約—「しょせん」と「どうせ」をめぐって」『副詞的表現をめぐって—対照研究—』ひつじ書房

- 高梨信乃（2006）「評価のモダリティと希望表現—タ形の性質を中心に—」『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版
- 高梨信乃（2010）『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』くろしお出版
- 高橋圭子・東泉裕子（2013）「漢語名詞の副詞用法—「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「太陽コーパス」を用いて—」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所
- 高橋圭子・東泉裕子（2014）「近代語コーパスにみる「結果」の用法」『第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所
- 高橋雄一（2015）「評価成分を作る「ことに」と「もので」についての一考察」『専修人文論集』97
- 高見健一（1985）「日英語の文照応と副詞、副詞句」『言語研究』87
- 高山善行・青木博史（2010）『ガイドブック日本語文法史』ひつじ書房
- 高山善行（2012）「日本語の配慮言語行動の歴史的研究—これからの発展に向けて—」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房
- 竹内美智子（1973）「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』明治書院
- 田和真紀子（2014）「程度副詞体系の変遷—高程度を表す副詞を中心に—」小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版
- 俵山雄司（2010）「「結局」の意味と用法」『群馬大学国際教育・研究センター論集』9
- 丹保健一（1984）「副詞の意味記述—「かならず」「きっと」の意味用法の違いに着目して—」『国語学研究（東北大学）』24
- 築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 友定賢治（2015）『感動詞の言語学』ひつじ書房
- 中右実（1980）「文副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 中川祐治（2006）「古文の副詞、副詞はどう変化するのか—日本語史から探る副詞の諸相—」『日本語学（臨時増刊号・特集「新・古文読解」）』25-5
- 中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房
- 中村幸彦（1971）「近世語彙の資料について」『国語学』87
- 中山緑朗（1986）「古記録の語彙に見る副詞—漢語副詞の登場—」『学苑』561（中山緑朗（1995）『平安・鎌倉時代古記録の語彙』（東苑社）に第2章第1節「漢語副詞の登場」として再録）

- 長島弘明・清登典子（1998）『近世の日本文学』放送大学教育振興会
- 長嶋善郎（1982）「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進・浅野百合子編『ことばの意味3』平凡社
- 鳴海伸一（2006）「漢語「一所」の受容と意味変化」『言語科学論集』10
- 鳴海伸一（2009）「「相当」の意味変化と程度副詞化」『国語学研究（東北大学）』48
- 鳴海伸一（2012）「程度的意味・評価的意味の発生—漢語「随分」の受容と変容を例として—」『日本語の研究』8-1
- 鳴海伸一（2013）「事実性をもとにした程度的意味の発生—漢語「事実」とその類義語を例に一」『訓点語と訓点資料』131
- 鳴海伸一（2014）「漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化—通時的観点からみた近現代の特徴—」新野直哉編『近現代日本語における新語・新用法の研究』国立国語研究所
- 鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』ひつじ書房
- 西真理子（2005）「話者の前提と陳述副詞 —従属節に生起する副詞を例に一」『北海道大学留学生センター紀要』9
- 西原鈴子（1988）「話者の前提—「やはり（やっぱり）」の場合—」『日本語学』7-3
- 西村浩子（2000）「鎌倉時代前期の古文書に見られる「所詮」の用法について」『鎌倉時代語研究』23
- 仁田義雄（1983）「結果副詞とその周辺—語彙論的統語論の姿勢から—」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 野田春美（1997）『「のだ」の機能』くろしお出版
- 野田尚史・高山善行・小林隆（2014）『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版
- 芳賀ゆかり（1986）「副詞の位相性—山東京伝を中心として—」『日本文学論叢（茨城キリスト教短期大学）』11
- 蓮沼昭子（1987）「副詞の語法と社会通念—「せっかく」と「さすがに」を例として—」『言語学の視野』大学書林
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子（2001）『日本語セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版

- 蓮沼昭子（2011）「条件文と理由文の相関―「（ノ）ナラ」と「ノダカラ」を例に―」『日本語日本文学（創価大学）』21
- 蓮沼昭子（2012）「事態の既定性と「せっかく」構文」『日本語日本文学（創価大学）』22
- 畠郁・西原鈴子・中田智子・中道真木男（1991）『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 花井善朗（2003）「モダリティを表す副詞の類義性と多義性―「やはり」「さすが」「しょせん」を中心に―」『ジャーナルCAJLE』5
- 濱田敦（1991）「「やうやう」から「やっと」へ―一語の意味の変化の一例として―」濱田敦・井手至・塚原鉄雄編『国語副詞の史的研究』新典社（2003年増補版による）
- 濱田敦・井手至・塚原鉄雄（1991）『国語副詞の史的研究』新典社（2003年増補版による）
- 播磨桂子（1993）「「とても」「全然」などにみられる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究（九州大学）』75
- 東泉裕子・高橋圭子（2013）「「結果、こういうことが言えそうです。」―コーパスにみる名詞の文副詞的用法―」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所
- 東瀬戸正人（2000）「「程度副詞」における程度性の変遷について―「あまり」と「あまりた」を中心に―」『別府大学国語国文学』42
- 彦坂佳宣（1982）「洒落本の語彙」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙5』明治書院
- 飛田良文（2006）『国語論究12 江戸語研究―式亭三馬と十返舎一九―』明治書院
- 深津周太（2016）「<ちょっとした型>連体修飾表現の成立と定着」『国語と国文学』93-2
- 福島邦道（1957）「江戸語覚書」『国語（東京文理科大学）』5-3・4
- 福島直恭（2004）「和文に現れる従属節の特徴」『学習院女子大学紀要』6
- 星野佳之（2001）「「どうせ」と「せっかく」の意義―「無駄」の回避―」『清心国文』3
- 前田桂子（2014）「漸本における程度強調表現「きつい」の消長」『国語と教育（長崎大学）』39
- 前田桂子（2015）「漸本における程度強調表現「とんだ」について」『島大國文』35
- 前田富祺（1983）「漢語副詞の種々相」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 前田直子（2009）『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』くろしお出版
- 増井典夫（2012）『近世後期語・明治時代語論考』和泉書院
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法』くろしお出版（2008年改訂版による）
- 益岡隆志（2006）「「～タイ」構文における意味の拡張―願望と価値判断―」益岡隆志・

- 野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版
- 松村明（1957）『江戸語東京語の研究』東京堂出版（1998年増補版による）
- 松村明（1986）『日本語の世界2 日本語の展開』中央公論社
- 松村明（1999）『近代日本語論考』東京堂出版
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 峰岸明（1971）「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論〔1〕—副詞の漢字表記を中心に—」『国語学』84
- 峰岸明（1971）「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論〔2〕—副詞の漢字表記を中心に—」『国語学』85
- 三原裕子（2012）「江戸時代前期の喃本に現れた「ござる」」『論集』8（アクセント史資料研究会）
- 三原裕子（2013）「後期咄本資料として見た三笑亭可楽の作品—「新作おとしはなし」を中心に—」『論集』9（アクセント史資料研究会）
- 三宅知宏（1995）「「推量」について」『国語学』183
- 三宅知宏（2006）「「実証的判断」が表される話形武—ヨウダ・ラシイをめぐって—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版
- 宮島達夫・仁田義雄（1995）『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
- 宮田公治（2012）「評価文副詞「～ことに」の制約—事柄の評価に関わる形容詞類の類型—」『日本語文法』12-2
- 向坂卓也（2009）「副詞「せいぜい」の用法変化」『言語コミュニケーション文化（関西学院大学）』7-1
- 村上謙（2006）「近世上方における尊敬語表現「テ+指定辞」の成立について」『日本語の研究』2-4
- 村上謙（2009）「近世上方における尊敬語化形式「テ+指定辞」の変遷」『日本語の研究』5-1
- 村田美穂子（2005）『文法の時間』至文堂
- 村山昌俊（1986）「江戸語「とんだ」考」『滝川国文』2
- 森勇太（2013）「近世上方における連用形命令の成立—敬語から第三の命令形へ—」『日本語の研究』9-3
- 森岡健二（1980）「口語史における心学道話の位置」『国語学』123

- 森田良行（1996）『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房
- 森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 森本順子（2000）「副詞、副詞の現在」『日本語学』19-5
- 諸星美智直（2004）『近世武家言葉の研究』清文堂出版
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- 矢島正浩（1999）「意志・推量助動詞の用法からみた近松世話浄瑠璃の文体」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』明治書院
- 矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
- 梁井久江（2009）「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5-1
- 山縣浩（2002）「方言書における共通語としての江戸語」『日本近代語研究』3
- 山口豊（2004）「近世後期上方語資料としての「鳩翁道話」について」『近代語研究』12
- 山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院（2004年増補補訂版による）
- 山崎久之（1990）『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 柳田征司（1978）「「ドウ」（如何）の成立」『国語と国文学』55-5
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館
- 山田孝雄（1913）『奈良朝文法史』宝文館
- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館
- 山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 山本尚子（2008）「「しょせん」に関する一考察」『日本語用論学会第11回大会発表論文集』4
- 湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究—抄物の語法—』大岡山書店（1955年風間書房版による）
- 湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究』刀江書院（1962年風間書房版による）
- 湯澤幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院（1991年増訂3版による）
- 吉井健（1993）「国語副詞の史的研究—「とても」の語史—」『文林』27
- 渡辺実（1949）「陳述副詞の機能」『国語国文』18-1
- 渡辺実（1953）「叙述と陳述—述語文節の構造—」『国語学』13-14
- 渡辺実（1957）「品詞論の諸問題—副用語・付属語」『日本文法講座1』明治書院
- 渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房
- 渡辺実（1980）「見越しの評価「せっかく」をめぐって」『月刊言語』9-2

- 渡辺実 (1990) 「程度副詞の体系」 『上智大学国文学論集』 23
- 渡辺実 (1996) 『岩波テキストボックス 日本語概説』 岩波書店
- 渡辺実 (1997) 「難語「さすが」の共時態と通時態」 『上智大学国文学科紀要』 14
- 渡辺実 (2001) 『さすが！日本語』 筑摩書房
- Bellert, I. (1977) *On Semantic and Distributional Properties of Sentential Adverbs*,
Linguistic Inquiry 8-2
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization* second edition, Cambridge
University Press
- Traugott, E. C. (1995) *The role of discourse markers in a theory of grammaticalization*, Paper Presented at the 12th International Conference on Historical Linguistics, Manchester. (web.stanford.edu/~traugott/papers/discourse.ps)
- Traugott, E. C. & Dasher, R. B. (2002) *Regularity in Semantic Change*, London:
Cambridge University Press
- Traugott, E. C. (2003) *From Subjectification to Intersubjectification*, Motives for
Language Change, London: Cambridge University Press
- Traugott, E. C. (2007) *(Inter)Subjectification and unidirectionality*, Journal of
Historical Pragmatics 8-2
- Traugott, E. C. (2010) *(Inter)Subjectivity and (inter)subjectification: A reassessment*, Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization, Berlin:
De Gruyter Mouton

要旨

本論文は、日本語の評価副詞の形成に見られる変化の特徴と傾向を考察した史的研究である。現在までほとんど研究されてこなかった評価を表す叙法副詞（評価副詞）8語（「いっそ、さすが（に）、しょせん、せいぜい、せっかく、せめて、どうせ、なまじ（つか）」）を取り上げ、歴史上の各時代の使用実態を実証的に検討し、意味・用法の通時的変化を記述することを試みた。さらに、評価副詞のあり方に対して通時的観点から説明を与える点で、現代語における副詞の意味記述の精緻化にも貢献することを目指した。

本論文は、全体の枠組みを示した「序章」、評価副詞8語の史の変遷を個別的に調査・検討した「本論（第1章から第8章）」、各語の史の変遷に共通する変化の特徴と傾向について総合的・体系的に説明することを試みた「終章」の3つから成る。

序章では、本論文の目的や方法、考察対象とする評価副詞の共時的・通時の研究における位置づけ、評価の意味の定義について述べた。そして、今なお明らかになっていない評価の意味を表す副詞の形成を説明するためには、通時的観点からの考察が必要であることを指摘した。

本論では、現代語において評価の意味を表す副詞8語「いっそ、さすが（に）、しょせん、せいぜい、せっかく、せめて、どうせ、なまじ（つか）」について、それぞれ第1章から第8章で考察した。用例は日本語史の各時代における言語資料（主に文学作品）から収集した。そして、副詞用法が発生した時期から現代語のような意味・用法が成立する時期を中心に、各語の使用実態と変化の諸様相について分析した。

第1章では「いっそ」の史の変遷を考察した。「いっそ」は、「対をなす二つ」あるいは「二つ一組」という意を表す漢語「一双（一雙）」を語源とし、「（両者を）まとめて」のような様態の意味で中世後期に副詞として用いられはじめた。近世になると、この様態の意味は次第に薄れていくが、初期例における「Pではなく、「いっそ」Q」のような構文環境を引き継ぎ、ある事態を好ましくないと捉え、そのような状況であるならそれより「いっそ」に後続する事態を選ぶしかない、という話し手の否定的評価を表すようになった。

第2章では「さすが（に）」の史の変遷を考察した。「さすが（に）」は、語構成の面で「そうはいうものの」の意を持つ上代語「しかすがに」に類似した語源を持つことから、副詞として使われはじめた当初（中古）は話し手の想定と対立する当該事態を修飾し、「そうは言ってもやはり」という意味で用いられていた。中世になると、話し手の想定と対立

するが、契機があれば「（そうなるのも）順当だ」という意味に読み取られ、このような例を経由して、中世後期からは話し手の想定と適合する当該事態を修飾し、「価値や意義のある」という肯定的評価を表すようになった。

第3章では「しょせん」の史的変遷を考察した。「しょせん」は、「仏教の経典によって説き明かされる内容、究極のところ」という意味の漢語「所詮」を語源とし、中世前期に「あれこれの事情・経緯についての結論として述べる」ことを表す「結局、つまり」のような副詞用法へ変容して用いられはじめた。中古和文の形容詞表現からの類推により、形容詞「所詮無し」を作り出し、それを契機として中世後期に「しょせん」単独で否定的評価を表すようになった。

第4章では「せいぜい」の史的変遷を考察した。「せいぜい」は、真心・誠心の意を表す漢語「精誠」を語源とし、「心・力を尽くして」という様態的意味で近世後期に副詞として用いられはじめた。近代になると、動作の様態を表す意味が次第に薄れていき、話し手の想定できる範囲での「上限」を表すが、その上限が（対比される前文の内容に比べて）低いことによって「たいしたことではない」という否定的評価を表すようになった。

第5章では「せっかく」の史的変遷を考察した。「せっかく」は、ある目的のために労力を費やすことを表す漢語「折角」を語源とし、副詞として使われはじめた当初（中世後期）は当該事態の実現のために心・力を尽くす様態的意味で用いられていた。近世になると、この様態的意味は次第に薄れていき、心・力を尽くしたことから含意される「価値や意義のある、好ましい」という肯定的評価を表すようになった。

第6章では「せめて」の史的変遷を考察した。「せめて」は、「追い詰める、責め立てる」などの意味を持つ動詞「せむ」の連用形にテ形が付いてできた語であり、副詞として使われはじめた当初（中古）は「つとめて、しいて」「切実に、無性に」などの様態的意味で用いられていた。中世前期になると、前の文脈に事態の実現が容易でない状況が現れることにより、「これ以上は無理と分かっている、それでもなお、これだけでも実現したい」という話し手の最小限の願望の意味を表すようになった。

第7章では「どうせ」の史的変遷を考察した。「どうせ」は、不定語の「どう」にサ変動詞の命令形の「せよ（せい）」が組み合わさった「どうせよ（どうせい）」から構成要素の一部が脱落して形成された「どうせ」が、その語構成要素である命令形「せよ（せい）」を含む句全体が逆接仮定条件を表すようになったことで、「どのような場合であっても（結局当該事態になる）」「どっちみち」という意味で近世前期に副詞として用いられていた。

このような意味は、話し手の意志や意図に関係なく成り立つことを含意するため、事態が表現主体にとって不本意に捉えられることもあり、このような例を経由して近世後期に「どうすることもできない、仕方ないことだ」という話し手の否定的評価を表すようになった。

第8章では「なまじ（つか）」の史的変遷を考察した。「なまじ（つか）」は、「未熟な、中途半端な」の意を持つ「なま」と「押しつける、無理に行う」の意を持つ動詞「しふ」の連用形が組み合わさって構成された。同表現が副詞として用いられた当初（中古以前）は「つとめて、無理に」などの様態的意味で用いられていた。中世になると、望んでいないことを強えられる文脈で用いられ、「仕方なく、しぶしぶ」や「中途半端に」の意が派生することになり、このような例を契機として、中世前期に「しない方がいい、すべきではない」と見なす話し手の否定的評価を表すようになった。

終章では、本論（第1章から第8章）までの調査・検討を踏まえ、評価副詞の形成に見られる意味および構文上の変化の特徴と傾向について以下のように結論付けた。

意味的側面では、具体的な事物や様態を表す意味から、「望ましい、好ましい」や「仕方がない、うまく行かない」といった話し手の評価を表す意味へと変化した。その成立過程には変化前の語義や語構成要素、文脈上読み取れる意味、類似表現との関係からの影響が見られた。

構文的側面では、まず、初期の副詞用法の時点で既に単文構造ではなく複文構造で用いられていた語（「いっそ」「さすが（に）」「せめて」）、変化の過程で複文従属節における出現例が出てくる語（「せっかく」「どうせ」「なまじ（つか）」）、副詞用法の初期例から前文脈に続く結論的な内容を導く因果性を持つ連文構造で用いられていた語（「しよせん」）のように、典型例から外れる特徴を持つ語（「せいぜい」）はあるものの、本論文の考察対象の大部分は単文構造ではなく、2つの事態の関係を捉える複文構造か因果性を持つ連文構造での使用に偏ることを確認した。

次に、構文上の特徴として、文中の述語の直前から文頭に位置するようになる出現位置の変化が見られた。ただし、「せいぜい」にはこのような変化が見られないが、1900年代以降から「～がせいぜいだ」のような述語用法の例（「親を帰省するのが精々であった」

（キタ・セクスアリス・1909年））が見られ、〈文中での使用から文末での使用〉という他の評価副詞とは変化の方向性が異なる用法拡張が生じている。構文上の位置が文中から文頭もしくは文末へと変化する副詞群の発達、日本語史のなかで副詞以外の話し手の判断や感情にまつわる文法形式（感動詞、陳述副詞、助動詞など）が発達してきた現象との関

連が窺えるものである。

上記のような意味的側面と構文的側面のかかわりから、評価副詞の形成に見られる変化パターンは次のように類型化できる。まず、評価的意味を表すようになる意味上の変化が複文構造や文頭などへの構文上の変化より先に生じる「意味先行型」、それらの変化が同時に進む「意味・構文同時型」、そして構文上の変化が意味上の変化よりも先に生じる「構文先行型」という3つのパターンに分類できる。

- ・意味先行型 : 「せいぜい」、「どうせ」
- ・意味・構文同時型 : 「せっかく」、「せめて」、「なまじ（つか）」
- ・構文先行型 : 「いっそ」、「さすが（に）」、「しょせん」

以上、本論文では、従来の共時的・通時的副詞研究においてほとんど研究が進んでいなかった評価副詞8語を取り上げ、意味と構文の両面からそれらの発達プロセスを記述・分析した。意味的側面では、概略、〈具体的事物や様態から話し手の価値判断へ〉という変化パターンが観察された。構文的側面では、概略、〈単文構造から複文構造へ〉および〈文中での使用から文頭での使用へ〉という変化パターンが認められた。これらの考察を基に、評価副詞の発達プロセスは、日本語史のなかで前置き表現のような配慮表現の発達に類似する例として位置づけられると指摘した。さらに、本論文は評価を表す文法形式の歴史的展開を明らかにする通時的研究の基礎研究としての意義を持つものと考ええる。